

山下晋司編

『観光文化学』

(2007年、新曜社)

評者：田邊 英蔵*

「観光文化学」を通読して、一冊の本を思い出しました。サマセット・モームの短編集「コスモポリタン」の自序の中でモームがこんなことを書いています。「コロンビア大学が、しばらく前『近代小説』と題する本を送ってくれ、私は面白く読み、啓発される場所があった。…しかし、この本に私を少なからず驚かせたことが一つあった。(この本の中に)扱われている書物について、如何に有益で、心理学的、社会的、倫理的文献として如何に高い価値があるかが詳しく書かれていたが、残念なことにそれらの作品の『面白さ』について触れた箇所がどこにもないのである。著者である二人の教授は、講義に出席した熱心な若者達に『小説は面白さのために読むべきである』ということ、長年の間、一度もほのめかすことさえしなかったようである。小説は読者の思考を刺激することもあろう、美的感覚、さらに道徳的感情をかきたてることもあろう。しかし、読者を楽しませることが無いとしたら、それはまずい小説である」云々。お送り頂きました「観光文化学」を通読して、私もモームと同じことを考えました。本書はまことに包括的で、現時点で観光を学ぶ若者達に必要なして充分の知識と観点を網羅していると思いますが、もしこの本が、或いはこの本をテキストにした先生方が、若さに溢れた学生達の心の中に、“旅に出たい”という胸の疼きを掻き立てられなかったとしたら、観光学に何の

意味があるでしょう。“山の彼方の空遠く、幸い住むと人の云う…”、私達の青春時代に口ずさんだカルル・ブッセの詩のように、未だ見ぬ国への渇くような憧憬を若者の心に目ざまさせることが無かったら、モームの表現を借りれば「それはまずい」授業だと思います。情報が多過ぎて、今の若者は昔のように海外旅行に興味を持たないと人は云いますが、そんなことはウソです。海に向こうには、この小さな島国に座ってTVを見ているだけでは知ることのできない美しいもの、壮麗なもの、驚くべき人間と文化が満ち溢れています。そのことを学生に教え、彼ら彼女らの心に灯をともしのが観光文化論…いやいや、観光文化学の目的だと私は思います。

次に、本書の中で沖縄の西表のエコツーリズムについてお書きになっておられる海津先生に一筆お便りをさしあげたいと思います。

西表…と聞いてドキリとしました。私が初めて西表の海で潜ったのはたしか1984年前後だったと思います。「こんなに美しい珊瑚礁があるのか」と驚いた記憶があります。ちなみに、私は日本のスキューバ・ダイバーのはしりで、初めてスキューバで潜ったのは(たしか)1960年代の初めだったと思います(若かったなあ!)。ダイバー(とヨット乗り)は目的地へ海から行き、当然ながら、内陸には入らない習性があります。私の仲間には「伊豆の大島へは何回となく行ったが、三原山は(海からしか)見たことが無い」と云う人物が何人もいました。そんな訳で、私も西表の内陸深くわけ入る機会はありませんでした。その後、沖縄の珊瑚礁が鬼ひとりで白化したという話を聞きましたが、どうなっているのでしょうか。西表に劣らぬ見事な珊瑚礁に囲まれたパラウの浜で会った米国人のダイバーが「俺は東海岸から三日がかりで来た。お前は近くていいな」と云いましたので「俺もガムの空港のロビーで一泊して二日がかりで来たが、近く直行便が入るらしい」と云いましたところ、「絶対に(直行便を)入れるな。ジャンボが入った

*元国際学部教授

ら（珊瑚礁は）最後と思え」と云いました。「観光は三つのものを破壊する」と云うのが私が文教大学にいた頃の定説でした。①自然、②文化、③（観光地の）人の心、でした。②、③は飛ばし、①について考えますに、観光産業は自然と文化とホテルで成り立っていると思います。美しい自然と秀でた文化のあるところに立派な、或いは、瀟洒なホテルが建つことによって観光産業は完成すると思います。常に問題になるのは、そのホテルの美しさです。神の造り給うた自然の中に、その自然をより美しくするような

建物が建って初めて人々は観光を楽しめると思います。いつか、コートダズールで夏休みを過ごす習慣のある日本婦人が「コートダズールでは、家が建つごとに自然が美しくなる。日本では何故そうならないのでしょうか」と書いているのを読んだ記憶があります。西表に建ったホテルが自然をより美しくする建物であることを、そして、わがまを云わせて頂ければ、おいしいドライ・マテニを出して呉れる見晴らしの好いバーがあることを心から祈っています。